哥林雜木抄目錄

冬

冬 話部五号　初冬 話部十六号　時雨 話部五十九号
落葉 話部八十号　殘菊 話部十二号　霜 話部廿九号
枯野 話部四号　寒草 話部廿一号　寒芦 話部十六号
冬月 話部廿七号　衾 話部四号
氷 話部四十九号　千鳥 話部廿九号　水鳥 話部廿四号
椎茸 話部二号　霰 話部廿二号　霙 話部一号
網代 話部十一号　雪 話部百七十五号　鷹狩 話部十五号
鈔雁 話部三号

炭竈 拾遺八首　　埋火 拾遺十二首　　神樂 拾遺四首

佛名 拾遺二首　　早梅 拾遺七首　　歳暮 拾遺四十九首

歌林雜木抄

冬

○冬々

木がらし　新六　人もとしなみやそ八落葉ふきてく又ふきもとる木枯の風　光俊

なごき松　月　明やらてさも長き松乃宮の内は宮乃内は宮乃内は宮乃

○初冬

ころもうち

十月朔日の更衣

秋ゆくは…

千年振神さび

冬のくる方角とさしていつる

初冬

初冬時雨

初冬霧

初冬木枯

初冬山

初冬

初冬

山家初冬　千載
玉石初冬　いつのまに　後撰
雪初冬　ちりしかは　拾遺
初冬落葉　秋はいま　後撰
霜雪冬来　一望さも　同
風送小来　寒雲は　摘
山鶯冬来　ちりて　千載
○時雨　うすくれの　後撰
ありとあれど　神無月　拾遺
時雨降　たちくれて　後撰
時雨乃条　付冬雨

たちくれの　古今
時雨降　千載
時雨降　千載
時雨降　千載

よこさぐれ　作者社家　この所ら流さくよこ時雨第のうこひよ第こうり　雅俊
・流よこ所ふ　春時雨　・初やの梅ら時雨　保梅時雨　・降も定ら　嚴時雨
・入日の新　若時雨　・初こぐれ・村しぐれ・村こぐれ　三玉　三玉及派方
初時雨　二云　長崎七百　晴ふりの雨こふ
時雨若冬　白川七百　朝日より雨ふりあ雨ら氏冬ハさ恨為冬
時雨知時　みこさぬと空よ雨れ哭のさやの新くよ時雨家　あ九こ代
時雨知時　源俊　偽乃なき世あり乃ら神名月こ減ら時雨初ん　定家
時雨知時　家集　こさねと知て雨こ知ハ雨れの冬し
時雨情張　千こ　夕つくひさもこ冬ふる郎山ら又時雨り村ても冬　降兼
時雨易ら　白川七百　いつ乃ら氏ふりもこ郎ら山の乃やこ時り村時雨ハ　賢方
凡前時雨　長崎百　山こ冬こ冬ふの山ら氏ふ時雨　作俊中
時雨雲　影ふ　こさこ冬し時雨こ雨ら方氏ら時雨　俊宗後
東西時雨　ふ雨れやこて入こ冬ふ雨れ中こ氏ふ乃ハ　牧伸

晩文時雨　作者　この時雨ともせ雨雲も光乃神ら神やぬこ雨　俊雨作作
夕時雨　俊長　俊長　ふこさぬとふふふ雨神名月个夕時雨の降降て　作家郎下
荒暮時雨　凡さハく文のこ乃村のよりひもあ人ともふ雨れ　為家為太
松時雨　名のりやこ雨れこ雨ふこ雨このふくこ雨て時ふ歌ふ　俊宗後
源松時雨　日　村こ雨こ雨て初こ雨ふ雨乃ふのハ時ハ乃ん　日
連松時雨　千こ　小野ふこ雨れやの梅ふこ乃ら時雨こ雨て時ふ雨乃雨ハ　作兼
山時雨　家集　松こ乃こ雨れの梅乃下の村こ雨れ雨ら雨れ乃雨ハ　長張
雨山時雨　俊千　ふここ雨れ雨ら雨れ雨ハ雨ハ雨ハ　俊宗製
時雨廻山　家集　九の字ハ雨ふ山雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ
峰時雨　神名月あこふの山乃ふ雨ハ雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨
谷時雨　千こ　今雨の乃ハ雨こ雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨
白川七百　山雨こふ山雨の山乃ふ雨ハ雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨雨
千こ　谷こふこ雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ雨ハ

杜間時雨
野時雨
野亭時雨
冥時雨
行路時雨
山路時雨
池時雨
滝音時雨
川時雨
海辺時雨
浦路時雨
舟行時雨
[illegible]時雨

山家時雨
山里夕時雨
山居時雨
家居時雨
遠居時雨
田家時雨
里時雨
屋上時雨
国時雨
松上時雨
松時雨
松風如時雨

雑体 時雨

時雨似涙

時雨敬愛

寝覚人時雨

待雨霜神

船中時雨

旅時雨

器中時雨

雪時雨

○落葉

このえ　落葉のちりしきてこのえのさびしさ

拍のこち葉

冬の葉

五葉松

拘木の落葉

ありの落葉

まつ

ちりぬ

葉の枯葉

ちりぬ

ちりぬ

ちりぬ

ちりぬ

ちりぬ

ちりぬ

ちりぬ

落葉衣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

落葉有聲　玉葉　風吹かなうの葉一ハそよぐ山の会せつゝうら山の波　惟宗藤沢
落葉秋の路　のあらはれぬとはら寺ハ苔手ともえりて　保仲公
を近落葉　　　

落葉流水
落葉埋井
落葉枯池
池上落葉
落葉滿地
江上落葉
滝落葉
河上落葉
海邊落葉
湖上落葉
浦邊落葉
禁庭落葉
寺落葉

新拾遺 大井川水のなかれもとゝめあへぬ紅葉かな 信実
同 今よりはとのゐ侍らじとて木の葉ふれば落てけり 惟宗為忠
落葉つもるふるのゝ社のもりのしたのぬれゝば枯葉まさりてぬれのゝ水 改秀
同 ものもうるふるのゝ社のもりのしたのぬれゝば枯葉まさりてぬれのゝ水 俊成
こやまちや梢まばらに成りゆく山の端の月の光のもれて入るかな 信実
摘 舟の内よりとゝまりて秋くれて入江の波もとゝまる紅葉の声 信実
家集 寄花山風もうもれぬ志ゝ人ぬ志ゝ人ぬ志ゝ人

落葉堪菊　拾遺　おち葉のかをりこそ捨れなれや菊は咲ても思ひ出るなん　赤染

落葉残梢　後集　梢まちうらぶれしるおち葉し　つれなくも嵐は残る梢かな　落葉の色のみ残る梢かな　坂本雪隆

落葉後樹　拾遺　木の下とくらくて　風とてこそ　おち葉形しく　木のかげ　なんとも　雪隆

落葉更松　おち葉のちりぬるかしこさ　松の本葉　おて後　なくし　松の本葉の後よ　散れて　枯こそ　冬の始なりけれ　源秋

松間落葉　千載　色こそ　松　吹風の　ちはハ　ちるハ　枝乃　おち葉　嫁ぬり　茂雄仲

松下落葉　拾遺　吹風やとまの梢とさそふらん　松の下　照なのおち葉　保安年　光正

落葉聚蔓　赤染　木葉ちるやとハ　やく乃　板底　よふもとよハ　ちもとて　雅政

旅不落葉　同　旅宿落葉し　吹ぬるふ　嵐とりふ　旅ねもる　消の家よ　本葉　あし　俊秋

落葉似千株　拾遺　おくなかこ　ぬ　ちるこ　小おち　葉とと　ちるこ　秋ハ　千年と　ちハ　橘行季

○ 残菊

梅ぬ　後拾遺　枝そん　後ぬ　ちや　白菊　ぬ　ちこ　ちこ　ちん　葉　物て　服部

霜枯の色ぬ菊　新後撰　霜ぬ　の色　乃ち　く　の　ぬ　ち　ぬ　ぬ　ち　ぬ　ち　ぬ　ち

紫菊映水　　新勅　神垣の紫菊の白菊は久しき秋のたぐひなりけり　長家
　　赤集　この冬は霜つもりの菊はなほ紫なりけりの色ぞ　義孝
　　同　神垣の紫菊の白菊は久しき秋のたぐひなりけり　雅孝
社頭紫菊　　風雅　花の色は花の友なる白菊は六十の霜や牧宣の涙　後宇多
廷紫菊　　赤集　霜とぞ南はうつろひぬ　定家
庭上冬菊　　新　うつろひぬ霜のなかれや菊より後の花の色よ　基綱
寒最菊紫

○霜

紫の霜　　新　紫の霜とぞ見えしかりの霜とれば見えしかりの霜とれば　作家
霜とれ　　新六　信濃なる霜とれば見えしかりの霜とれば　同
　　赤集　久しの霜とれば見えしかりの霜とれば　同
けやひの霜　　赤集　けやひの霜のかれとぞ見えしかりの霜とれば　作家
霜乃衣　　新六　ちはやぶる神の御代の霜の衣　行家
霜とくる　　同　はつ霜なる花の紫なる霜とくる　作家

霜ぐらし　　新六　谷深き岩屋の霜ぐらし　定俊
夕こもる紫　　文木　夕こもる紫の霜ぐらし　
つもれる霜　　俊成　おくつもれる霜ぐらし　
　　新　紫の霜ぐらし　
岩家の霜　　新　紫の霜ぐらし　前大納言忠家
おくれる霜　　同　おくれる霜の霜ぐらし　定家
松の際つる　　新　松の際つる霜ぐらし　
霜ぐらふ　　建保　霜ぐらふ夕霜ぐらし　俊成
ふるの霜　　新　ふるの霜ぐらし　

霜の月　　千載　霜の月の霜ぐらし　定房
かくれの霜　　新六　かくれの霜の月の霜ぐらし　
霜のみりは　　新　霜のみりは霜ぐらし　
かくれの霜　　新　かくれの霜の月の霜ぐらし　
　　同　かくれの霜の月の霜ぐらし　

霧あらん霧

霧の色と人の記めるようなれども

霧よりつくる　霧の家を人めいられぬ苔の家をきりて定家

霧やくひ色　やうひハ八家し八家よりくるに義家記し

霧やくひ色　左今　霧やくひとりとれせね桐葉の色さ祐盛

霧よりのれる　寄みこ　併くりも淋しきハ霧よりのれるの乃ハ中の定家

さやぐ　笹の葉若葉なりとよ色ぬれハさやくと言あり和し

霧ろ〻ぬつ　霧ハよハつるの毛衣やろ〻ふぬる霧ハ色と称とあらん　後拾遺院

・霧の八色ぶき　霧籠宅　・初霧・夕霧・霧れ・霧れ・霧乃ら葉

・霧ふる・霧こゆる・霧とろ　れこふ及院寄

霧を乃ハ恋霧　秋の乃家ものとり霧ろもれの〻乃ハ長こ〻ろ　後拾遺

曉霧　月　曉の空も霧こ花ハれ初淋ハ後拾遺霧の霧代　為忠

霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧

霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧

霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧

霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧

霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧

霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧

霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧

霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧

霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧

霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧　霧の霧

社頃雲
家花雲
庭雲
宮と庭雲
草雲
篠雲
竹と雲
竹乃雲
松雲
松竹雲
松路雲
霧籬雲

月 ちやうろう長い雲をさして物ゆかしけれ
月 いかつちと雲路も社よりうつて雲あるこのよの長雲 家隆
月 さかり花乃庭は花菜の郭ちつけ雲をとろと雲る雲 月
百首 郭さも切籠よおく名は花乃村と雲よさして仏堂 道冬院
無心所歌 宮まよ心人あかりれそ雲のこ結ふこ雲ふ花ふ雲 太房歌三
さくらる被ハ風乃雲と雲ふ雲二乃夕雲 雅孝
家集 ろ〳〵雲のとろ〳〵れ寺の竹のふ雲ふ雲 家隆
歌 村雀花やとろぬ雲ひあれや竹の雲よと明とやとろハ 後拾遺院
月 雲やこひとくハ排紫ふ雲ある竹よふ月しくろ雲ふ雲 改邦
家集 庭の松巻乃竹よとろ雲の下ふ〳〵なる千世ふ雲ふ 定家
松路ハ松のせとろ路なる人と雲人 家隆
月 三橋乃ふ松の夕雲ろ雲ふていろふ結ふ雲人と雲人 家隆
歌 雲ろ〳〵ぬつるれ色衣やろ〳〵ねる雲もかしと雲雲人 後拾遺院

代と雲
羇中雲

月 秋もとろ〳〵代のふとく雲をとろ〳〵ぬも雲ふ河乃風吹 後拾遺院
家集 郭ふ雲ふ初雲ふろ〳〵ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ 清輔

○枯野

名ふ社の雲ふ社養 新六 雲ろ〳〵名ふ社の雲ふ社養ふ雲ふ雲ふ人もなり 衣笠内大臣
こがれ〳〵ふ月 月 名ふ社よふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ雲ふ 作家
一むふ咲る花子 文治三年百首 雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ 定家
一むふ渡る雲ふ 貞応三年一字百首 雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ 為家
くさ〳〵れ 千首 雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ 為尹
名ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ
新続古 雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ 後拾遺院
枯野篠 千首 初雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ 刑部卿
枯野鹿 歌 枯野篠雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ雲ふ 師兼

[illegible]　　旧集　一年も今いまは末枯の村雨ふるよりの風の音ふき　後拾遺

○宣草

萩のうれは　　拾遺　しのぶもよりの露ふるさとの面よ萩の枝に咲ける　般門院大輔
冬のおむ　　後拾遺　うれ枯るそのくれなゐの色の下　実房
まれの下ふき　　風雅　ふりつる我ともとうつる書のやうにうらたの色の下　実房
宣の下萩　　新拾遺　深草のれいかはもうつやけうしひ宮やく宣の下ふき　雅永
宣草　　拾遺　よりふき宣かりにしの人ふさへを宣草はいまは宣草　雅永
とうこ　　家集　とうこ　　拾遺　かりの人今宣草はいまは宣草　雅経
宣草　　新古今　くさの宣かりの人今宣草はいまは宣草　雅経
うら是　　新古今　くさの宣かりの人今宣草はいまは宣草　家氏
れの宣草　　拾遺　ふるとうれの宣草　女房
ふいくさ　　月　宣草のとうれのとうれの宣草のとうれのとうれの宣草　季保

くさの秋　　後千　宣草のくさの秋　基綱
むぐ　　拾遺　宣草のくさの秋　俊成
宣草のいくさ　　支木　宣草のくさの秋　俊成
宣草のいくさ　　五社百　宣草のくさの秋　俊成
宣草　　後拾遺　宣草のくさの秋　俊成

• うこ草や宣草　　こ心
• 草草宣草　　こ心
• うこ草　　所伝宣草　　こ心

鄙　草草宣草　　千載　法花経や秋の草のうれの萩のと紫と紅と草　紀康永
草　冷草草宣草　　後拾遺　草のうれの草草草

朝霧を苅
夕霧を苅
霧を苅る
霧を苅まれ
霧を苅終る
霧を苅る処々
霧を藪苅
山霧を苅
澗霧を苅
景霧を苅
水霧を苅

野分霧を苅
野任霧を苅
朝野霧を苅
原霧を苅
行路冬を苅
水辺霧を苅
古江霧を苅
放生霧を苅
山家霧を苅
庭霧を苅
閑庭霧を苅
墻根霧を苅

○ 宅を葱

こぐれ行
葱の村雨
波の村芦
下かれ
志ゐれ柴
あしの花
あしの穂
こかと芦
あしで

乱葱の柏葉もさやぐこ波哉 為信
なゝかゝる入江は宅をこそ夕日新おさも淋し芦の村雨 通村
あしゝ〳〵と波枯しのゝこゝよ霜は浪の村芦 政為
葱の葉もかれ〳〵こ波の入江の月の新もさびし 定家
汀なる芦の志ゐれ小ぶきれりこほとゝの浦風 為家
村雨る雲とおもゆるかゝる柏は芦の白このゝ 忠方
あしの波ふるこゝろをのけよ波ともこゝぬ宅を波 源頼長
こかと芦はふれるこ村雨芦の入宿こりぬこゝ 定久
芦のよの中に義こ紙のこゝくなるゝとゝよ宅芦は沼
さゝこなれと芦の羽ゐれ入こ宅
子どゝふるの毛衣ゐ一つの義こ宅俗る芦は浦風 遠孝
芦のゝる葉 雲波こ入江のこゝこゝやらて芦の広こ村雨 宗雅

ゐ葉
ゐ原
れゐ
下こゝれ
・志ゐれこゝ
邪宅を葱芦風
朝宅を葱
宅を葱処々
宅を葱隔れ
池宅を葱
古池宅を葱
江宅を葱

ゐ葉

塩尻 志ゐれゐこゝれゐこゝれゐこゝ

[illegible]

○氷

[illegible]

[illegible]

社のこだち　新拾　こきつよ八表こだちに月やとる　為尹
水のくまひち　作法のとの水はまくりをの波の水ぬれにけり
水の橋　新古今　もとハの波乃みとの水ぬ乃水の波の水乃ミとハ
水の雲　文木　弱とてもとハの波ハ旅人の水乃ミの雲ハ　家長
たゝこゝろ　拾遠　水ハおとくらてくむるの水の雲とハ　為忠
もとハの水　拾遠　たゝこゝ水をハのとなる乃ら波り水ハやらの世ま社有ル　俊頼
芦ゐの水　新　らやの池乃蓮るの水ハ乃ら波ハ　兼大納言
夕こほり　文木　いらなり色る氣そと色川みそ氏派も夕こほり世　中務
うもゝひ　万代　蓮水をいふ　新玉集
こほり結ぶ　作左社　蓮風とゝる水ハ結ぶ波ハ　云々

いで〜水　拾百　宗祇云ゝ〜〜〜

谷の結氷　行路絶凍　冥路氷　橋下氷　舟路氷　氷凍之音　氷函氷声　氷閉氷　氷不流　遣氷氷　氷閉細流　波浪氷不定

金葉　谷川のうちとけぬ氷とけそうるかもとけぬ結ぶらん　門大夫
都芳三示　ゆきかよふ橋の氷も氷や　花宗
新後拾　ゆきかよふ川氷も冥となりぬ　源人ふ知
日　さし捨て行の舟の氷　宗清
日　舟路は舟のゆくかよふ波の氷　宗清
日　舟路氷　道光法院
日　舟氷結ひまより氣今又よるれ川のゆくや氷　源宗平
後拾　久くしれ氷とれのくとうて光りの声とあと氷　後拾
玉木寄合集　せこうりせ氷さのくれ川つらあて井とあは波れ声絶ぬ　
日　結ひあ波とあ氷て流れねと氣ろと氷ろ　
日　ろ氣氷ふ波の氷れいつのるようとむ氷ろの氷和ん　後拾遺
日　結ろ氷ねれ氷ねれ氷の毎乃常もとれろ氷　
日　波立て水の氷ろ氷ろ　
古新川ふく氣ふ波ろ氷行乃氷結ひ和ん　後撰

氷結波不起　新　氷結ひぬれ波立もとと
新　氷なりれ氷なとれ氷ろんと氷浦　六条宮文
玉集　池ろよさゆる氣と侵て氷る氷の結ふ氷りろ　後拾
池之氷　池氷初氷　池氷晴結　池氷半氷　凍封池面　氷満池之　氷閉池氷　池氷似鏡　江色氷

日　氷ろ氷ろの波るの氷や氷ろん氣ろ氷ろ氷結ぬ　
日　氷ろの氷ま氷ま氷ま

江の始氷
瀧之氷
氷初閉滝氷
河之氷
氷閉河の
湖氷
湖辺氷
初湖氷
湖の氷結
汀氷
古渡の氷
石間氷

家集 ぬまのこほりの所々にてはよはかるべきとて
月 みちのくやしのぶもじずりたれゆえに
乱れそめにしわれからかは
家集 ながれてはいとどしがらみかけそへて
瀬をはやみいわこすなみのおとのみ
家集 ながれてはいとどしがらみかけそへて
瀬をはやみいわこすなみのおとのみ
月

月の影
雲の歩れ
雲くもり
こがらしの
吹おろす月

新後拾 とこ波こそ八十宮治川乃ありあけ月に歩もこけ 光盛卿入道
新続古 文はの秋新さむし波らの雲は歩れる冬の月 後鳥羽院
雲くもり おほろよ雲くもる月新と二村雨を歴れ菊 前民部卿 雅有
新六 生くもり雲こそ秋は歩れ木枯の吹おろす山の八月 為家

雲間冬月
夜更る山風あらし雲くもり出る月の新雲間 隆祐
新古 入りなて林なそ地と時雨つる雲ともこそ沈る月 良経
冬歌冬月 雲雲る庭の木枯ふこ分て月かるやと可人もる 西行
山冬月 日 山深き落葉ろうはやとても月小落れ雲と之 後鳥羽院
新続古 林 さ小夕も光も文はてくれの雲は有明乃月 後宮院
冬月 家集 い年とろこひのこる公てこよ今幾ろ冬の月の 後京極
雲秋冬月 日 のへ乃月家ゆやと白雲新とる涉ら月は雲秋 慈円
秋亭冬月 新後拾 とすのとろれの清れ涉とひね月斗ある涉ねハ 統 後宗尚
関路冬月 清ろ雲りる涉ら月は雲ろ冬の月新 普光院

水ろ雲と月
ろ江冬月
月見映氷
池上冬月
川上雲月
涉辺冬月
湖上冬月
泊冬月
社頭冬月
古宮冬月
山家冬月
関庭冬月
旅庭冬月

新後古 ろハ一涉滝つ山川早き流れる月に新てくく 雅有
新 さも雲を分絶りせる雑後月ともそ芦火焼 信実
日 しもろまかろひて新の涉ろれハ歩と月のつ上ろる水 後鳥羽
家集 月新の月一光やて鴨の上毛の雲も沈乃ちり也 慈円
後拾遺後拾 ろ雲さゆ桂の星の川上ろ川上ろ月ろ沈てやは月も沈乃 為家清輔
家集 清ろ入ろ人ろ人ろ庭ろ水月の雲 摩雲
新拾 ろ月の浦やを雲ろ月ろ歩て出る有明月 慈円
白川七百 浦ろ入れ上ろる涉ろ松ろ雲ろ月ろ雲ろ月ろ 志紀
家集 供りとろ雲てとろひる雲の月は雲ろ冬ろ月は 長明
新 ろ入ろ月ろ月ろ月

冬河月

冬嶋月

冬松月

冬岡月

冬深月

冬霞月

松雪月

雪松月

雪嶋月

雪野嶋月

雪霞月

後鳥羽院

山のはそれともさしぬれて雪ふかく有明の月は三位通氏

新勅

ふるさとの雪のあけぬそのあけぬそのあけぬ有明の月

散木奇歌

こうさ山松れる雪とうかぶて白雪の月とぞ見る

新勅

とよあの浦よりとくめぬ雪もあるる雪の月はいかに 信実

後拾遺

月は冬の夜のあひかれも 後宇多院

赤集

久かたの人めもかれる雪の夜ぬる有明の月 赤染

後宇多院

急心を

雪のうちの松の月は雪とも見えぬ人も雪ぬ雪の月 雅康

新勅

いしなりの雪ぬ人も雪ぬ雪の月 雅康

日

雪ふる月の光の通ひつるあられやうかき冬の月 定家

赤集

あられふる冬の夜ふかしよみ月の雪ふるかひくもる 赤染

雪の月

雪ふるき野の雪の月の雪ふるかひくもる 赤染

雪の月

雪の月の雪ふるかひくもる 花宗

雪霞月

雪霞月

月雪似雲

○食

あさかほの

おぐるゝ小食

あさでこ食

蔵王のあつ

姉とふと

あるき食

後拾遺

みそぎとてかはらの月のなれと物食とそなれられる 孔仲

まつ

ゆうなる月とはし

あせ人よりれくせいはやくふるれるこ小食 仲実

あさて小麻ひなるこ

えこいとふねのこやの家はまあさてと食りは

こそこれも蔵王のあつ食ちこまりせいとうと 後鳥羽

忠房

姉やのとよ食さうはよかれと姉と食はこと小羽 兼宣

上月

あれいてくひ句さ家のこそふはさ食のひはさ 為俊

琴の音の響
秋のかぜ
りやの響

なぐさめの響
ゆさげの響

夜の響
[illegible]の響
[illegible]の響
[illegible]の響
[illegible]の響

○椎柴

れ柴

新六 [illegible]
六百番 [illegible]
月 [illegible]
支木 [illegible]
[illegible]
月 [illegible]
[illegible]
月 [illegible]
後撰吟 [illegible]
千載 [illegible]

[illegible] 仲実

[illegible] 中宮大夫家房

[illegible]
[illegible]

部 椎柴雲深
外ら椎柴

○薪

[illegible]
[illegible]
[illegible]

部 薪

○千鳥

後撰百 [illegible] 仲実

月 椎柴よりこ[illegible]
[illegible] 後拾

月 [illegible]
家集 椎柴とつま[illegible]
千載 [illegible] 常陸

[illegible] 為経

[illegible] 椎柴 師実

後撰百 [illegible] 所仲

月 [illegible] 大進

月 [illegible]
[illegible] 兼宗

[illegible] 仲実

行のちとり　新六
ささの波やけのちとり
夕ちとり　拾
いちとり　日
中路ちとり　赤集
柳せるあとの川原の波ちとり
声のあらき　支木
ちとり川の岩ちとりなれば千鳥の
岩ちとり　清輝
有明の声　拾
ちとりもいとはしかるべきかもの波ちとり有明の声　家隆
ちとりの　五帝
ふるなれのやおいらんちとりの　俊成
あとしたてちとり　千載
ちとりてふちとり泉川岩波ちとりのこゑもしん　家
むれちとり　千五百番判歌方
ちとりせ川岩方なひくせの波むれちとり　俊
川波ちとり　万代
浦入ちとり波ぬ岩ちとり　俊
夕ちとりけて　支木
ぬ波ちとりの浦ちとりの　作家
素とふちとり　拾
ちとりつまとふちとり波ちとりの　家隆
みるちどり　日
神ちとりのこむれたとまみる千鳥立田の原よりやたち　俊
家隆

とちとり　支木
とねののちとりとりふ　日
小松ちとり　拾
岩ちとりなんぬ　宝治二年百首
夕ちとりあちとり　文治六年入内歌合
ちとりふ千ちとり　金葉
千ちとり波ちとりふちとりの　文治六年入内歌合
声ちとれて　久安百
浦ちとり　赤集
やちとせの　古今
波の山ちとりの　支木
一あさと　ちとりは乱食とちとり食とぬる
友なしちとり　拾
ちとり波ちとり波ちとりの入波よ波ちとりちとりし　支木
羽打ちとり　支木
いちとりちとり　赤集
とちとりの　支木
とねのちとりとりふ　日
小松ちとり　拾
岩ちとりなんぬ　宝治二年百首
夕ちとりあちとり　文治六年入内歌合
ちとりふ千ちとり　金葉
千ちとり波ちとり　文治六年入内歌合
声ちとれて　久安百
浦ちとり　赤集
やちとせの　古今
波の山ちとりの　支木
一あさと　ちとりは乱食とちとり食とぬる
友なしちとり　拾
ちとり波ちとり波ちとりの入波よ波ちとりちとりし　支木
羽打ちとり　支木
いちとりちとり　赤集

千鳥なくこゑ　有明の月よむとて　とよみ侯　拾抄
雲のあなたに　拾抄
さかのの雲かあなたに　拾抄
月はなきこゑ　拾抄
志かひのなる　拾抄
夕なこゑなる　拾抄後撰
あかつきやあけぬらん　拾抄
なかの海の波とちとりこゑ　拾抄
大海のこゑ　拾抄
とよて　拾抄
なかの海の　拾抄
なかの海の波　拾抄
なかの海の波　拾抄
なかの海の波

湖上千鳥
漁子鳥
浦名千鳥
浦伺千鳥
浜千鳥
磯千鳥
海千鳥
海千鳥
旅泊千鳥
波千鳥
戸波千鳥
岸千鳥
松辺千鳥

○水鳥

うきすの
水名所玉藻
むれておりのろ
そぐひの雪
下やもとろ波
あの村雨
早船はおろ
あるあそび
そのつぐひ
松のそ

つねあるこひ　拾六　池よりはてしてのつるさはそはさてく　素覆ひのそ　沢心　俊実
とも　五拾四　やの池の　芦ふかれハ　ふかやの　友　鴨の　拾六　俊成
鴨乃　文木　しまてい　川立も　雪ふりて　ふるの　ねやの　ふるさと　なり　寂蓮
うき　鹿の　鴨と　浮　鴨の　鴨　鴨　なり　我も　田のとの　落ぬ　道信
ての　毛衣　沖くら　素のうきと　立て　やての　毛衣さ　ゆくん　為家
りろこ　千載　くさ　色の　素と　鴨　ふん　友　鴨の　とり　法　声　鴨　保教房
ての　貞応二年内裏歌合　素　鴨　鴨　の　会　乃　おち　ひも　千世　とも　ぬる　鴨の　池　虚　俊
つらく　乃　枕　水の　ひらく　乃　松　木さ　て　独　やと　鴨　よ　鴨　ん　為家
ろづく　鴨　鴨　鴨　乃　つく　鴨　鴨の　落　ふけ　ゆく　毛　よと　毛　ふん　俊秋
ひらく　乃　家　鴨　の　素　鴨　神　よ　ゆく　ひつら　く　乃　家　鴨　鴨の　独　ね　宝治二年百首　空　秋　二度　冬　後
つぶく　宝治二年百首　鴨　つら　ぬる　てい　の　慰　ゆく　素　鴨　ひの　池　と　ゆく　ん　後九条内大臣　後
てい　の　毛　内裏歌合　打　ぬる　鴨　乃　つく　鴨　鴨　て　てい　の　毛　ゆく　素　有　鴨　俊成卿女
友　千五百番歌合　素　乃　立　と　の　ろ　翅　て　ひ　て　て　友　ろ　ひ　と　の　ふ　夜　保　ふ　ふ　後鳥羽院

てい　の　村　名　定家卿　之　公　鴨　ろ　浮　て　流　く　ろ　ひ　ろ　ふ　れ　て　ふ　て　ろ　鴨　の　村　保仲卿
一　ひ　ぶ　て　の　ろ　名　家集　て　ろ　川　出　ろ　ろ　の　鴨　の　一　ひ　ふ　ひ　て　も　も　ま　ふ　浮　保　も　長明
て　の　ろ　名　文木　て　と　芦　ろ　れ　水　よ　浮　れ　て　ひ　ろ　ひ　よ　ひ　つ　く　鴨　れ　名　おく大納言　俊房
ほ　ぶ　ひ　の　鴨　日　位　な　て　ま　ひ　ひ　の　鴨　や　宮　ん　ま　ひ　ろ　む　ね　ま　ろ　ふ　俊定
鴨　の　一　ま　ま　ま　雅　は　ま　の　ま　れ　ふ　ま　て　ま　ま　ま　鴨　れ　ま　ま　ま　ま　俊宗
も　ぶ　く　日　雅　は　ま　の　ま　れ　ふ　ま　て　ま　ま　ま　ま　鴨　ま　ま　ま　ま　俊宗
日　雅　は　ひ　の　義　さ　芦　の　落　ふ　ま　り　れ　く　鴨　は　て　ま　俊人宗
雅　は　ひ　の　義　さ　芦　の　落　ふ　ま　り　れ　く　鴨　は　て　ま　俊人宗
つ　ま　れ　き　て　日　夜　川　つ　ま　れ　き　て　の　鴨　き　け　ま　我　て　て　の　き　ま　り　ま　日
家集　ま　ひ　ま　日
や　ひ　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま

さハぐ入に　新後拾遺　むれてゐる　拾遺　ちゐれ　芦の　つ　ハ　ゐ　ゐ　ゐ

雪中水鳥
嘆水鳥
彩色水鳥
衆水鳥
衆色水鳥
衆水鳥
源衆水鳥
水間水鳥
池水鳥
池水鳥多
源水鳥
沼水鳥
江水鳥

衆集 池のうち八重つもれる雪をかきわけて水鳥の
新色石 多やとも有明の月と池のうちはねをかわすと聴やがん 為定
彩後拾 弘法 沙とけるゝ後とはなり玉て底よ刈て池の水鳥 守覚法王 後拾遺
おとけて我や袖の水鳥の衆も少し侘て居と 後拾遺
衆集 谷深き花のうき舟やはなの水鳥のさらぬ方や先歩るゝん 氏久
源後拾 宮るゝよ八月し入江も芦鶴のさらぬ方や先歩るゝん 兼盛
衆集 爰さめてゝ声ゝ池水や冬のやとよ八月なるゝ 兼盛
月
衆集 爰と宮ゝ沼の水鳥
彩後拾 入とりの下乃ゝうひも結ぶん波なゝ池の少よ 定家
池ひろゝ汀のゝ水鳥の青苔を分るけさゝつく 後拾遺
衆集 白波よさゝく沼の水鳥もおちゝいりのやるゝ一江 家春
月
なゝゝ宮よ沼の袖ゝおいゝとゝゝゝゝ人を宮拂 月
衆 冬のよハつゝハぬ宮もなとゝよ月し入江やとゝ月氣 為子

川ゝ鳥
湖ゝ水鳥
ゝ鳥多
水鳥近馴
芦間水鳥
独ゝ水鳥
水鳥知主
水鳥驚代
水鳥別舟
一鳥ゝ宮水

源後拾 友宮川のゝ宮ゝ宮ゝく鴨ゝ宮ゝ 後拾遺製
彩 入鳥ハゝゝ川なゝ鴨ゝ宮ゝ 為家
いゝ芦の西ハ秋の宮乃ゝ本紫ゝ宮ゝ水鳥 道家後
源後拾 ゝ人ゝ近くなゝゝゝゝゝ宮ゝ 仲実
及家 ゝ川の袖ゝなゝゝゝ
ゝ鳥乃ゝゝ神の宮も別れて袖ゝ別ゝ芦の 後拾遺
新勅撰 水鳥乃ゝゝ新の家ゝ宮ゝ宮ゝ 別
衆集 ゝゝと知て別ゝん
衆集 ゝゝ宮ゝ鴨の別ゝ宮ゝ 定家
月 代ゝ宮ゝ清滝川のゝ鴨ハゝ鴨ゝ宮ゝ 慈円
月 ゝゝゝゝ宮ゝゝゝゝゝ舟ゝ別ゝ 道家後
月 ゝゝ宮ゝ鳥の別ゝ
ゝ川のゝゝゝ宮ゝ舟ゝ宮ゝ 代

○細代

ぐぐと夫　孔季
あぐろ人　拾遺　あぐろとる人なるべし　枕
をぐろ　をぐろふはしもと細代人舟ぐろふなるべしとかぐろひて　枕
をぐろこそ　をぐろとこそ　枕
ぐろひを後撰　細代木よあぐろこそ　枕
せぐのあぐろ　宣旨　枕
あぐろの家　あぐろの家　枕
あぐろり　枕
細代ぐろ舟人　枕
いさぐろふ波　枕
せをしげれひと　枕

あぐろ木の布　あぐろのぐろ布と袋のやうにしてなんともぐろひとのぐろ
拾遺　やうにぐろぐろ
ひとのやうにぐろひをそへて面ぐろ　ぐろすイ
・あぐろぐろ・ひとのやる・ひとのぐろ　ひとぐろ及ぐろ　作時布
鄙　ぐろ細代
舟思細代　舟もぐろいさぐろ波のぐろぐろとしてぐろ　宗子木
新千　川せよ袋のぐろぐろとしけれ細代舟ぐろぐろ　道々後
枕　袋中細代　袋なぐろぐろ　落ぐろ
細代を　千ぐろ　細代木よいさぐろ波も歩ひとをぐろぐろ　耕ぐ
袋細代　枕　迷ぐろいさやこともぐろ　知と細代ぐろぐろのぐろひを袋とぐろん　作兼
河細代　うぐろぐろ　紙ぐろ
蓋袋袋細代　原集　ぐろぐろとなぐろ　蓋袋のぐろぐろかぐろ　袋れぐろ　知　や
蓋袋袋細代　枕　袋ぐろぐろ　袋ぐろの布袋ぐろぐろぐろとぐろぐろ　西ぐろ
細代拜持　枕　袋ぐろ袋袋ぐろ袋ぐろ袋ぐろ

細代伝友
細代時雨

新拾 細代にと絶しく人のまことをねがつてよりて日と雲に決 左国
家集 彼のまよいの末の風ひかりあるまやこの谷の切の後京極

○霰

なるのれば
さくや

後後撰 さくぬさに神をうられる冬のよとあれ枯はる霰降し 弘忠
円 あれぬる織ぬさくやのそらに花ぬ霰やはらる 定家
新撰 うき雲の一むらとる山あるは霰ふりて霰ふるれと 為世
雲のはるかなるふる
雲の乱るる

円 霰ふる雲の乱る附日霰とそくて霰ふるとく 為茂
後撰 風のとともにさくなるとしなるく雲一むらは霰降し 定嗣
新拾 雪のまに枝れる雪ともせてうとうる霰雪てうく 為兼
さばしる

雲ひとむら

円 山のひかりとともむし
あつまやのまつうるきの下をてひとうむと霰降し 忠信

円 うるくし係みもふるあれ小流山おろしのれるまこと 紀伊
新拾 方るふうもりて雪まれてあれ落るあれの世界 定為
霰落くる
枝やのあれ
むとしく
霰とふる

新 ふれても秋の霰枝に枝やの霰ふるふ 後拾遺
家集 風はやみ雪よりむとまく霰行乃小枝よりそいはゆる 基俊
円 とふるはるしる
風さむく雪ふる水はるる岩よりれるふるの柳木 雅世
代大社 ふるはれ秋の涌のおるてくるくる我袖霰小
ふくくる
椎柴のされな
家集 ふる落とくれは椎柴のされなは仕ふむあれる 仲実
てふ

・ふとくくる・ちるくる・霰かくるく 以上霰沈之

歌 雪霰
涼文霰
霰音波霰
霰数霰

頃千 雲のこの乃有明の月も秋さして涼や霰の玉ちる霰 為氏
家集 明方もはるるこの木枯はあれ侍ふせ霰ひくしくの 定家
円 あれのちるこの霰のさるるし破いさむるんし
よとさむこのひくるて中とるあ霰とふる霰も霰り 道之後
千載 さく侍ふとも枯の霰とはやいれるも涼霰小 俊兼

霞路霞
寝覚霞
鶴霞
花霞
源氏霞
源山霞
林霞
野径霞
野外霞
行路霞
橋霞
海霞

家集 ちれの寺よりなどとこのこもとんて
千そ 散れねの花はくるかのよりはなかるかのとそ花の紅かさ 海辺霞
色ちて
いつとなくわ霞ふるとんうきくりる鶴をれくえうて霞のうそ紅ありりろ 耕のて
日
ふしの月はけ霞てうう花やのとよ又まうて降あれか 海山霞
ちたかの
九大会
家集 なうき花は霞乱て文まうわむのととうそ霞も花 春海
日 おくふの柴の海よりまて降あれの毎うもあ隠日
ふうう小霞乱て明るよの早の林も霞宇市 遠方霞
拾遺集 ふ神の山陰のとうも神まうに降あれかあそ
九雅 霞ちの小春風てうもあ降あれか 如信三室院入道お方院
家集 冬の月のうくいそくやとう霞ちられも花れ 定家
拾遺 ふ海の家の外九めくに霞さうふ海のうけし 小春院
拾集 雅はうもひまあうもも海て霞よさいく夕波の声 四条宮院

演霞
山家霞
金花霞
草庵霞
屋霞
古屋霞
宮園霞
金花霞
除霞
竹霞
竹むら霞
柳霞
柴霞

拾 おうさうの風かさ霞の波のうう村あねの霞の対 海秋
日 よりふく宮の霞よ霞えて有明ふ月とうの月 白家
宮ちうの花の花の花の花の牡ねよんくうて霞ふれり 長秋
家集 ちもちはくさの宮ふうしく霞ふうとのくい屋 長秋
長秋 板ひさ竹の柱のうれよ月かうふけとふうれか 仏製
家集 彩はなう色ふの霞はまれて月もうれと降あれか 牡丹
拾 宮ちう神やはあれのとうとう
霞ふうう月よつうて竹近き秋家は文神ん方もか 遠方院
日 屋の西はふう色あれの海られかとかてとふ海 雅有
千そ ふれちふ除ふ家のうう秋さうねよふく神れや待 師兼
長秋 宮ちう花の神ふの家よとうれて竹のふそ沉海霞 仏せい
家集 風はやう屋よはむとあれ竹のう秋まうそふう沉 長秋
住吉社 ちふれうう月ふ霞のむうはは冬海ふちうとうう
家集 ふくれの柴ふう民のてとうちふ霞ふうふうて月民 春海

舟中霰
霰似玉
羈中霰

文治二年十二月十八日 漕舟のうへの雪も砂とまがひて散てらるゝあられ 後京極

家集 こゝにもかくてくる冬をこゝろ乱てふる滝つせ 拾遺

日 冬のりはあられ打とて八波よせくるのかなせ 定家

○霙

建後百 冬されば雪ふる霙八月の落の雪もてゝとそれと思 別仲

日 あめの下ふるとなしとられきはなよ〻まつぬ霙ゆゑり 右近

六百番 うきさかすわこそやきをそあてゆもらてあ雪ゆゑ 建仁歌合

百番二年百 あれくるし冬の空ふるこゝろ霙ふるこゝろ 式子内親王

新勅撰 月夜をこゝろ月のもとそれの花やはらの山の雪ゆけ 後京極

霙

○残雁

後撰 雪ふる沼つゝき 雪ふる沼つゝきをきゝ打むとて落ふる田の刈方の雪 雅世

日 とくれとし 雪中残雁

日 とくれとしんよりふるは雪の花ゆゑ 西行

日 雪ふる沼つゝきあれてやとし初よ八月ふる雪れ初雁の声 道信

千載 雪ふるかり田の面よ月落て夜もとのちる雁の一村 俊恵

新 村雨残る冬田よりとのとの友や秋ふる 後拾遺

田残雁

○雪

建後百 ふるつゝゆき 雪ふるつゝゆきふるは雪の花ゆゑ 西行

新 ふる雪八月ふる雪れ初雁の声 道信

日 ふる雪八月ふる雪れ初雁の声 道信

ふる雪

後撰 雪のつもる時蓑のうへにふるころ衣し
後撰 雪のこの夕ぐれ衣打きつて春きぬ待りと敬るれば 敏行
雪ふりぬとて 後撰 ぬれぬ事はとわ泣しまうるあるとられぬひる雪皮ひて 俊孝
こぐれの雪 後拾 木ぬれ雪ふれの雪し
完俊 こぐれの雪ふれ打てひろふ秋ぬるやさ山ゆ山 師教
雪のふる 後拾 木ぬふりつゝうゝうゝふたなゝ
本新 ひりしに枝て折りなるおの〳〵乃花乃雪の下ふた 紀家
雪乃あさ山 新葉 ふるさむさ和山の雪ハ花ちて雪乃落る雪乃明 孔交
花ぬの落雪 月 早唐さ花の落雪ぬられて仰とぬ風と指ふて 淺
雪の花乃月 月 山陰や友と和一沿ゆりてふゆ〳〵乃雪の花乃月 後京極
雪の和風 月雅 ふう和やとふゆ貴捉て花の梁乃風雪乃和ふ也 はちか冬
雪乃夕風 あふれ山ゆ別也て沿乃佛さや行の林乃雪の夕風 基綱
有明の月 古今 高雪と有明の月ふるゆまるゆ〳〵ふゆ
和ちゝけ有明乃月ふるゆふゆ山の雪ゆ深ゆ白雪 見列
木ふる山 月 雪ふれハ木毎ゆ花ふるゆふれと花とわふてわはゆ友のう

うゝらの雪 後拾 白髪とふ
年暮るかゝらぬ雪ハ大空のひとりふるゆふて髪 曽禰
夕こゝ 新後拾 ゆふ凝し
沿ゆりうゝは雪のゆふゆりまゆてかゝる花の下雪乃家
ふるのね雪の花 古今 花の根とふのゝ沿雪ふれふとふゝん花の沿 後人ふ和
ふゝ雪 ふゝふ乃花の和ふの沿雪ふれふとふゝん花の沿 後人ふ和
雪の月 ふふゝハふゝふふゝふゝ和ふ雪の一沿 雅世
雪乃白沿 うゝふふ沿和のふゝふふ沿ふゝふ雪の月 円
雪ふふ近ふ山れ 雪ふて花ふふふふふ沿ふふ雪まふ近ふふふふふ 為家
いや山ふふふ沿 ふふハ沿ふふふふふ

友ゝつ雪を

雪のつゝきてゆんとて消ぬ雪乃消ぬ物しこれと
俊頼 あやつ雪とつゝ
消そらして友仏雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ
花の雪のゝ枝枝枝

雪とゞぐ寸社 月

迷ふ駒

雪の中むらゝのこゝちもされば迷ふ駒の沿そ知て 今上

このゝこゞ

鹿の毛のさゝなるとくさゝてけつる雪 中納言家

こゞれ居る雪 夫木 白山の麓ふれば白雪のうのこゝちに降とも浦 清浦

きるゝの粹 夫代 歌路よは粹とそさて降つひ雪の浦さと知し

初雪のきゝうの粹ハ雪降く降りぬる時ハ雪とハきそて

かゞ雪さく

夫木 くらゝハ雪きゝ雪降ふれしてうく降ゝ

加ゝさく 歌の山路の旅とても雪よ降ぬ雪とゝふ 源仲正

行のハ分ゝ降雪 家集 ゝゝ雪ゝゝ雪ゝゝ雪

・木くの白雪・雪をとり・雪の山・雪のひ・雪のトくさ

歌

待雪

雪未深

消雪

浅雪

深雪

積雪

月前雪

月照山雪

風前雪

雪散風

雪降風

雪似白雲

雪後雨

雪天雪

雪中山雪

雪中梅雪

朝雪

暮雪

夕雪

夕月映雪

岸雪

雪中岸柳

秋深雪

遠日雪深

速日雪

雪遠日深

深山雪

寒山雪

暮山雪

山中朝雪

暮山雪

秋思山雪

雪滿群山

雪ハ或ハ松竹の雪ハ物の声なととよりかうるこれさ
物ハ雪とゆへといふハむ川しき歌し雪ハ雪とゆへとに
明やらぬ福ゆの床ゆ雪ハ色の竹の雪ハ形 能兼
駿林七百
明りも又さて宝ぬ月ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ
玉葉 光月もりつきうるこ雪し
ゆ形の竹乃雪ハ 雪ハ
歌 日とゆれハ雪ハ人の見ぬ雪ハ 実清
伝集 ゆ人ハ雪の雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ
千載 ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ
家集 雪のとと明ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ
歌 くりれくるも宝ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ
源氏物語 ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ
歌 冬の雪乃雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ
新勅撰 ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ
つくハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ 秋雅

山皆雪

山野雪

山陰有微雪

雪峯落照

雪嶺雪

岸嶺雪

谷雪

古溪雪

岸雪

松山雪

村乃雪

歌 山ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ 実清
新勅撰 ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ
ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ
歌 山陰ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ
吹過る風ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ
雪峯落照 歌集 落日の雪の峯ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ
入日さし峯ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ
他用ハ入
今ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ
歌 落葉せ一枝ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ 曇花院文
千載 ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ 為平
新勅撰 ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ
家集 谷人のゆきハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ
歌 松山やハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ 家隆
源氏 秋の色ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ 後拾遺 紀貫

林雪
野原雪
夕野雪
野径原雪
雪埋野径
野外雪
野亭雪
原雪
冥路雪
冥路晴雪
冥路雪形
冥路雪原
冥路雪海

家集 冬ゝれの雪の林より花の雪と今もこそ散
詞 ずいであらん散の雪ともいはしとぞ
詞 ゝゝ凡の雪の跡ゝゝ人の軌ゝゝ
新拾遺 ゝゝ人の軌ゝゝ
伊勢物語集 山守もいかよりん降雪にとそのゝたはとゝれなりゝ
新拾 ゝゝ又ゝゝわもゝゝ
家集 雪の間はなゝてひとつはゝ
詞 降ゝゝの原
家集 ゝゝの六ハ雪ゝわ
詞 雪のゝ降たの雪の板底ゝ
伊勢物語集 雪のゝ降ゝ
千載 ゝゝ降ゝ

冥屋雪
路雪
径雪
行路形雪
山路凡雪
山路雪
澤路雪
澤路凌雪
雪深
雪深樵路
雪埋樵路
雪埋苔路
雪義帰路

千載 降雪ハ雪ゝ降ゝ雪ゝの降ゝ
詞 ゝゝ雪ゝ
家集 ゝゝ人の跡ゝ雪ハ
詞 行ゝ
伊勢物語 ゝゝ迷ゝ
詞 ゝゝ雪ゝ
千載 ゝゝ雪の跡ゝ
詞 ゝゝ雪ゝ
家集 ゝゝ人の跡ゝ
凡雅 ゝゝ雪の跡ゝ
詞 ゝゝ雪ゝ
家集 ゝゝ人の跡ゝ
詞 ゝゝ雪ゝ
千載 ゝゝ雪の跡ゝ
詞 ゝゝ雪ゝ
詞 ゝゝ雪ゝ
詞 ゝゝ雪

橋上雪
雪埋古橋
氷上雪
氷上雪
池色雪
池雪
江上雪
江天暮雪
河色雪
夕川雪
海色雪
海色松雪
湖雪

浦色雪
浦雪混波
浜色雪
磯色雪
湾雪
浦上雪
浦浪雪
色浦雪
浦松雪
田雪
都雪
洛初雪

花洛雪
洛陽雪
禁中雪
社頭雪
古寺雪
山寺雪
九仞雪
水路新雪
水仞雪
水仞若雪
雪付雪
雪付雪

千載　花の色も枝かすかにあらはれて雪の下ぶる春の雪かな　俊成
新古今　住吉の岸の今朝の雪もまだいつぬるかはの雪　啓盲
玉葉　花の雪ふもとの春の雪ふもとの春の雪　後京極殿
千載　おなじ雪ふる中の雪ふるとてかはの柳の枝ぬれん　寂蓮
三十首　さゆる雪ふる神も雪ふりぬ源さえぬ雪ふる　道家
家集　雪の枝の雪ふる寺の雪ふる　家隆
同　雪の沼といふ人の沼ふる人と成ぬる　慈鎮
新　水路八丹のもりの雪ふる　新雪は初雪し
俊の上人や降ぬ雪ふる　仁製
同　水路のとあるまきの雪ふる
家集　雪の物の雪ふる雪の雪ふる　季経
千載　雪ふる雪ふる雪ふる雪ふる　家隆
玉葉　雪ふる雪ふる雪ふる雪ふる　師兼
新古今　雪ふる雪ふる雪ふる雪ふる　定家

星雪
市中雪
山星雪
山家雪朝
山家雪夕
田家雪
星花雪
花雪枝
花雪源
花雪似月
花雪歌法
花雪歌人

後千載　雪ふる雪ふる雪ふる雪ふる　兼氏卿
千載　雪ふる雪ふる雪ふる雪ふる　家雅
新　雪ふる雪ふる雪ふる雪ふる
千載　雪ふる雪ふる雪ふる雪ふる　師兼
家集　雪ふる雪ふる雪ふる雪ふる　雪
後拾遺　雪ふる雪ふる雪ふる雪ふる　雪
千載　雪ふる雪ふる雪ふる雪ふる　雪
新後撰　雪ふる雪ふる雪ふる雪ふる　法性寺入道前関白太政大臣
新　雪ふる雪ふる雪ふる雪ふる　か　後鳥羽
新　人ふる雪ふる雪ふる雪ふる　師兼
千載　雪ふる雪ふる雪ふる雪ふる
家集　雪ふる雪ふる雪ふる雪ふる　雪
新　人ふる雪ふる雪ふる雪ふる　雅経
日　雪ふる雪ふる雪ふる雪ふる　雪
小　雪ふる雪ふる雪ふる雪ふる　道家

窓前雪　千載　つくづくとひも解つれの雪おもかげ人を恋ふ　後拾遺　師兼

新窓雪　千載　あつもりし言の白雪ふりつもる　後撰　くれ竹のかりの世をいとはれて又ふりくるよはの雪かな　雅世

竹雪深　日　神さびやかすへの竹よりの雪のうもれ行ふ雪を深れ　後拾遺

竹間雪　日　友いさみ新さ深もかよ雪ふる行ふ雪を深れ　後拾遺

雪埋竹　日　むとのこさそ人やうて又雪をふりて松と成ん　雅世

雪似花　後拾遺　あハ雪も松のうつ深ぬれいろ〳〵消ぬおもかれ　前参議

松上雪　千載　芳雪さ人やを深ふ人やを松よとりて松のしら雪　師兼

松以雪　千載　ふるても風を深ふ雪ふりて松の雪を深ふ　後拾遺

風掛松雪　日　雪ふりさかもひくもよの雪よ深ぬ松の頃　日

雪中見松　千載　雪ふりのかの乃ふ乃ふ雪さ深ぬて松の深ふ雪ゆ　耕雲

松雪深　千載　ひるなもひく松ふ雪とふて牡雪とり松の松ふ　立雅

松雪深　日　ふりつひ雪を松の松ふれる

雪中松樹色

雪埋松　今ふれの雪ハ深れて雪をふりく深の松ふ　家隆

雪作松樹花　日　青　ふる雪ハ松の花のひとなるとし　後拾遺　お代とるものとさせふ雪ふれハ松ふ深ふ有ル　良暹

松雪　後拾遺　冬さされハ雪の松樹神さひて花ふかる雪の白ゆふ　経盛

雪中深松　千載　ふりつひ雪を松の花のうれるし　良経

山も花もふる深の中を雪を深ぬ松の村立　良経

梅糸雪　日　松と雪を深ふ雪ふりて梅糸ふ枝もあらぬ雪　後拾遺

花を殺木雪　新後拾遺　冬さふて深さふ雪ふる深ふ雪　花大代

雪朝を樹　後拾遺　ふりつる松ハの〳〵ふ雪をそれとふ深の花さふれ　後拾遺

雪を樹深雪　後千載　雪ふりのふる深ハ深ふ雪ふる深の松ふ　俊秋卿下

雪花を定樹　千載　雪の花ハつふれの木と定ふ深の花とふるし

雪を樹花　後千載　雪ふる深ふて松も松ふれハ同じ深ふ雪の花とし　為家

百ふやふる深の松ふれハ千世の雪のひて深ふ　後成

雪中鳥
雪鶴
馬上雪
雪朝侍人
依雪侍人
雪中忘人
雪中待客
雪中客来
雪中を恨

雪朝漢光
雪中望
雪朝眺望
眺望山雪
雪朝をうる
雪中をうる
雪中梅真
雪中侍客
船中雪
雪中眺
雪夕雪鏡
旅山雪深
雪中振り

旅宿雪
羈中雪　旅行
旅泊雪
石江雪
伏見里雪
淀草雪
雪釣
雪中法
雪中恋
鳥雀
欲雪天　玉葉
歳暮淀雪　新

○鷹狩

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あさごろ

引こもと名

[illegible]

くさとふ犬

いろひ

さう人

ゐる犬ぶぐひ

とまわし

ねもとつる

[illegible]

名のをぶひく

かり杖

ことしへ名

鶯のわらと

そこくろの

さ衣の毛

ゑ鶯

おのへこと名

しをおりこう

つれの鶯

鶯のわらと

[illegible]

とゝとゝすつ
くあかとび
ゝゝろぶと
こうれたゝう
こうり人
ゝゝろぶひ
あさる狐人
とりつゝ鶯
とゝへぐさ

月 をゝとゝ名のり〳〵さゝ山の岸は人と寄て者さゝれけりゝとゝろし
ゝとゝ者ひの名やゝ作ん鶯人のゆひの岸はをゝ入て 同
名のさゝゆ近れて花さゝとゝれてくゝれのゝゝひゝく郭し
月 のひやゝめゝく疲の鶯氣ゆゝさゝれて水鶏高寺 同
新六 ゝれのゝゝ乃みのゝゝゝと名踏立てゝ名ゆゝ 衣笠前尼
支木 ゝゝ乃ゝゝとよのゝゝゝ行ゝゝゝ鶯氣休ゝ月もゝ 三条のゝゝ 補仁
新を百首 雪もゝられゝれゝかゝれゝゝゝゝの系ゝゝ行ゝよゝ 後鳥羽
支木 紅ゝゝゝゝの冬ゝゝゝゝ鶯ゝゝゝゝゝゝゝゝ 家隆
七首 ゝゝ名のゝひゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ狐人 為家
支木 ゝ狐ゝゝゝ平ゝ鶯ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 保季
新六 ゝ狐ゝ一ゝ鳥のゝゝれゝゝゝゝゝゝゝ 中納言
狐ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 俗

• ゝゝ名ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
• ゝゝ衣 • ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

狐場風　　金山集　久くれハ淀の川風さむみかな　人麿
狐場雲　　拾　こそれゆくかのとうてい神のゆき　定家
狐場欲雪　　千載　日の影のうつろふくさてと限りてをとゝ思ふ　俊恵

○炭竈

こう埴し　小神山や焼炭ゆすまうはし　俊成
凡木　　小神山　　千載
とゝの宮　　新後撰　ゆくゝ　八炭ゆゑもとゝの宮ゆ　　
　　新後撰　炭ゆゑもとゝの宮ゆ　　
凡木こうこべ　　拾遺　とゝ　　
　　日　炭ゆゑの長あくんとの山ゆ煙のさく立のゆうられ　　俊源
くらあこう　　伝方社　　
　　家集　炭ゆゑの宮ゆ　　
炭ゆゑの宮ゆ　　家集　炭ゆゑの宮ゆ　　
炭の小束　　拾　　千載　　拾　　一年のゆくれる程と数やゆ知ようつるとゝのとうる殿　　有相

炭やき衣　　三百六十番　冬ゝ山のとゝやき衣なれなとて人と人の恋ひ　　俊人
はゝ木の炭竈　　夫木　　
炭ゆゑの炭竈烟　　夫木　　拾集　　
　　夫木　　
炭やく　　日　雪ふりてゆくも知ゆゝ山ゆ炭やく家ゆ　　
炭やき絹　　日　絹の程小神人の炭やきぬのとけ　　
とゝ木　　新六　とゝ木ゆ冬ゝ炭木とゝ山ゆ　　
　　日　なゝとゝ　　
　　家集　　新後撰　　
炭竈烟　　夫木　　
炭竈烟　　夫木　　
炭竈田烟　　家集　　
初炭竈　　大原やきの炭ゆゆ　　
を近炭竈　　日　とゝ　　

遠炭竈　九雅　炭ゝの畑ハ[illegible]とそれとして狂歌をしとゝ乃ゝ山さと　平貞村
源山炭竈　千載　炭ゝゝゝやゝ定ゝ名歌の雪ふりうんたもゝん　道之後
黒炭竈　千載　おもとゝ炭やゝ[illegible]ハ打ハて烟絶とぬとの〳〵山里　師長

○埋火

埋火の灰　玉葉　埋火と[illegible]ようゝゝて表れ消れおれ所ゝ[illegible]ゝを　相模
ふゝ[illegible]ゝ寸ゝ　九雅　冨ゝゝゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

炉火忘冬
炉火似春
若炉火
向炉火
炉火少
囲炉火
独対炉火
炉辺深談
炉辺懐旧

○神楽

冨うぐ〜

炉火のあたゝかなるまゝに冬をわすれいるゝ
あるゝこと春なるべき年の一年も又冬をもわすれぬ炉火哉　後拾遺
炉火のあたゝかにハ浦嶋うて春は似るとし
春よ咲人竹なくぬうつゝ火の光と春とゝろものとも　改選
山集
山ゝの深かりゝふるゝ雪をやとゝろゝ雪をよハ炉火　宝治院
うゝきおこも神の炉火乃かゝ和ふゝきゝの友ゝ知ぬ　後拾遺
おきいつる神やゝわ思ハれて寄ゝとゝ雪ハ炉火のか　雅永
いゝつゝみ神の炉火ゝ引て宮のひゝ背くもやハ　玄孝
春も山ゝゝ人ゝとゝと霞歌の炭炉火ゝとの〻秋院はてゝ真
以旨　友どゝ炉火乃あゝゝりゝて帰よおゝゝ〻ぬゝし
炉火乃光と春とゝなるゝあゝはゝとゝ先ゝゝゝ〻ぬ　遺拾後
夜集
ゝみのゝ思ふ背乃ゝひなゝゝやゝれ別ゝさぬ若ハ炉火　後拾遺

冨うぐ〜　五楽
山ゝやゝゝと知ぬ冨うぐ〜寄ゝゝ春ゝゝやゝゝゝん　入乃ゝ
改たた

炉火のあゝ乃　神楽
神のいとゝゝ　冨の神
神ゝゝ八十氏人　弥彦院
神ゝゝ八十氏人の社乃ゝ神代ゝゝゝ　弥彦院
りゝ人　弥彦院
ゝゝつる社　弥彦院
ゝゝ琴の神　弥彦院
神ゝゝび　弥彦院
ゝゝづゝ神　弥彦院
松のゝ乃神遊ひ　弥彦院
ゝゝゝ社　弥彦院

炉火のゝ乃　神楽
神のゝゝゝ　冨の神
神ゝゝ八十氏人の社乃ゝ神代ゝゝゝ　弥彦院
ゝゝつる社　弥彦院
ゝゝ琴の神　弥彦院
神ゝゝび　弥彦院
ゝゝづゝ神　弥彦院
松のゝ乃神遊ひ　弥彦院
ゝゝゝ社　弥彦院

小安
ゝ実
紀伊
俊之
為実
為兼
行家
安度
ゝ萬葉
ゝ実
安部院
ゝ家

ゝゝ乃ゝ　竹葉欽穂木葉為ゝ英ゝゝ
ゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

そこなくの
仏のこゝろ　後拾遺　世の法仏の出名と唱るし
そこなくの乃仏のこゝろと皆きけハ
雲のこゝ人名字　月　仏名ハて雲のこゝ人名字也
小松又て今そ法師宮ん乃こゝ人名字也

竹の灯
みよの源　後拾遺　うつけらやさ引ろ竹よ小松又て竹の灯小松又てつくりやこもに消んとすれ　実世
捻乃ひゝき　家集　こゝよの源乃こゝ消へつゝ長きよハ光りやこゝひ消らゝ　後拾遺
のぶ
一年ハ光れ共ハ変ハ光ハ　後拾遺
こゝ乃ひ
こゝ乃ひ　月　こゝ乃ひ　新六　伝とゝ
こゝ乃ひ　こゝ乃ひ　こゝ乃ひ　

梅花書屋

年門松

○歳暮

年の暮

年の末

年の終

年の瀬

年の尾

年の名残

年の別れ

年の行末

年の行方

年の行衛

年の行くへ

年の行くすえ

年の行くさき

年の行くあし

年の行くあしの音

年の行くあしの音の

年の行くあしの音の聞

年の行くあしの音の聞ゆ

年の行くあしの音の聞ゆる

年の行くあしの音の聞ゆるや

年の行くあしの音の聞ゆるやう

年の行くあしの音の聞ゆるやうに

年の行くあしの音の聞ゆるやうにも

年の行くあしの音の聞ゆるやうにもあ

年の行くあしの音の聞ゆるやうにもあら

年の行くあしの音の聞ゆるやうにもあらま

年の行くあしの音の聞ゆるやうにもあらまし

年の行くあしの音の聞ゆるやうにもあらましか

年の行くあしの音の聞ゆるやうにもあらましかば

年の行くあしの音の聞ゆるやうにもあらましかばと

年の行くあしの音の聞ゆるやうにもあらましかばとも

年の行くあしの音の聞ゆるやうにもあらましかばとも

年の行くあしの音の聞ゆるやうにもあらましかばとも

光乃そこ　五社百首　月日のこなたこそあとやられいとの底こそわ年はこそ　後成
春明るこに　南山百首　なる年とこそもさらやもさらつ　後京極
ひとこの矢　拾　年の年く春るとこそ矢のこと　ふもられなやらふらはそれ　ひてけ年ぬ矢の早さ　道さ後
・こ冬つさ　・年なこ　・こ冬の人のいそく　・こそいかわ　・おそ　ハー

公さふ人　後方

歳暮雪　家集　くれそ　雪　後成
雪中歳暮　拾　ふもかく　ひつひ雪　ハはやともこれけ年　弟ちやハする　西敏
歳暮深雪　基綱集　くれてけ年おこそ　ふの雪　ふ　歳　て　歳　釈玉　西方
歳暮　千そ　いこつ　ふるも　ねるよ　ねりこ　ておと　ふ　年　宗雅
情歳暮　家集　ふ　ふ　ふ

古寺歳暮　家集
雨花歳暮　千載
山家歳暮　同
市歳暮　新
家々歳暮　同
歳暮梅　同
歳暮松　千載
老後歳暮　同
老懐歳暮　新
歳暮鳥　家集
旅歳暮　新拾
独歳暮　新

歳暮述懐　公実
歳暮懐旧　家集
送年　新
老人送年　千載
老人惜年　同
子有惜年　千載
雪与歳深　新
依老待春　同
四年立春　新
春隣近　同
隣侍春　同

春ごとの隣

雪中除歳

炉辺除歳

歳々除歳

舟中除歳

除歳俳句

月

春もやとりのかなしき

雪もなほ春ちかき世をつくる春の儀のあるなり

家集

こゝろにしる梅の雪の明そめ初むるやとを人と問

歳

惟少の春のかすみやとをとはれ春の夜

やとをとふ今年の春の

しの人中毎こゝろにしたがひて又やつひに道を

俗

春ごとの年とをかさねにも世の俗のはるのとをれも

作者

春雨